

### 3 熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析結果について (令和6年度(2024年度))

原田千恵 豊永沙耶花 中嶋 進 近藤芳樹

#### 1 はじめに

微小粒子状物質（PM2.5）の環境基準は平成21年9月に設定され、熊本市においてもその実態を把握するため常時監視を行っている。質量濃度は平成24年に神水本町に自動測定装置を設置して測定を開始し、その後測定装置の移設・増設を経て平成27年3月末からは8箇所で測定を行うようになった。

また、PM2.5の発生源等を解明し対策に役立てるため、その成分についても分析を行っている。まず平成25年に神水本町でフィルタ捕集による試料採取を行い質量濃度の測定とイオン成分・無機元素成分の分析を開始、平成26年度からは炭素成分についても分析を開始するとともに試料捕集地点（以下「地点」という。）を3箇所とした。その後、大気汚染常時監視測定局の配置見直し等を経て現在は基本的に環境総合センター1箇所で試料採取を行っている。本報では令和6年度に実施したPM2.5成分測定結果について概要を報告する。

#### 2 調査の概要

##### （1）地点及び試料捕集期間

上記のとおり、現在は基本的に環境総合センター屋上（3階、地上高11.1m）1箇所のみで専用の捕集装置を用いてPM2.5のフィルタ捕集と成分分析を実施している。

地点概要を表1、位置を図1に示す。

表1 地点概要

地点名	所在地	地域の状況
環境総合センター	東区画団町大字所島404-1	市東部に位置する平坦な田園地帯

試料の捕集期間は、環境省が定める「微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析ガイドライン」<sup>1)</sup>（以下「分析ガイドライン」という。）に基づき全国で時期を統一することが有効であるとされており、例年事務連絡で調査時期が示されている。本市もこの事務連絡に従い、季節ごとに14日間連続で捕集・分析を実施することを基本とした（これに加えて、精度管理のための二重測定を2日間行った）。また、装置の不具合等により捕集できなかつた場合は、可能な限り期間を延長して少なくとも14日の試料を確保するよう努めた。捕集装置は2台設置し、それぞれ四フッ化エチレン樹脂（PTFE）製フィルタと石英纖維製フィルタを用いて試料を捕集した。捕集時間は各日午前10時から翌日同時までの24時間とした。捕集状況は表2のとおりである。

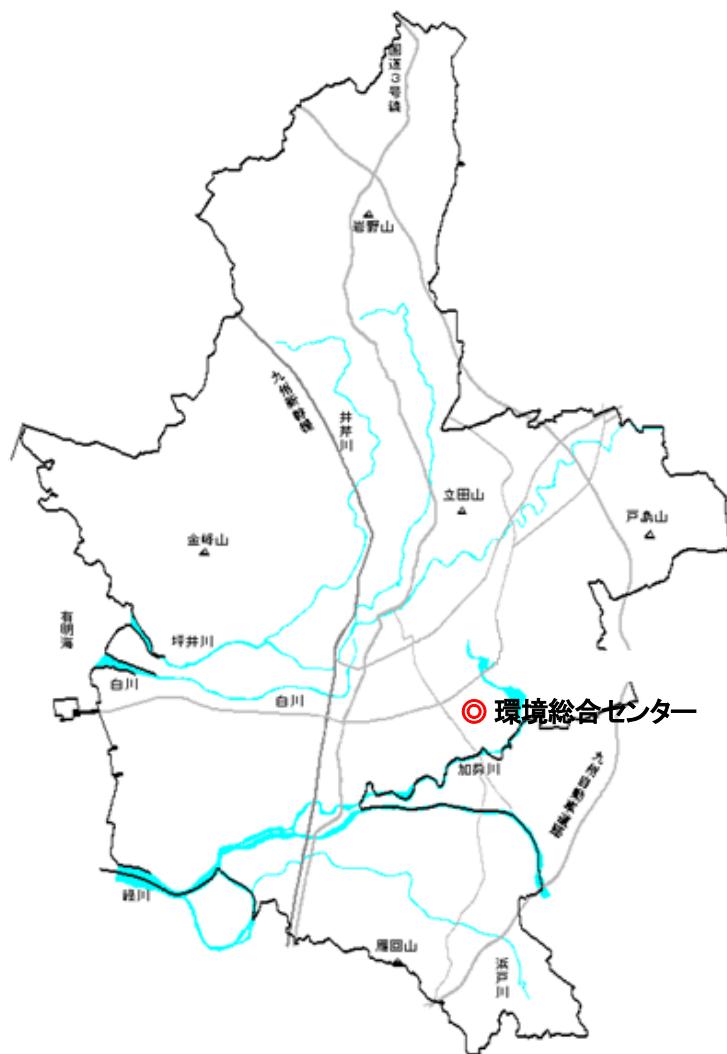


図1 地点の位置

表2 捕集状況

区分	期間（捕集開始日基準・二重測定を含まない）	捕集できなかつた期間
春季	令和6年5月9日～5月22日	なし
夏季	令和6年7月18日～7月31日	なし
秋季	令和6年10月17日～10月30日	なし
冬季	令和7年1月16～1月29日	なし

## (2) 試料捕集及び分析の方法、測定項目

試料の捕集及び分析方法は、分析ガイドライン及び環境省が定める「大気中微小粒子状物質(PM2.5)成分測定マニュアル」<sup>2)</sup>（以下「成分測定マニュアル」という。）に基づき実施した。捕集及び分析方法は表3に、測定項目は表4に示す。また、炭素成分測定については、令和6年度は外部分析機関へ委託して行った。

表3 捕集及び分析方法

項目	方法
粒子捕集	PM2.5ロウボリウムエアサンプラー(Thermo Fisher Scientific FRM2025i)を用い、PTFE製フィルタ(Pall Teflo、Cytiva製(冬季のみ))及び石英繊維製フィルタ(PALLFLEX PRODUCTS 2500QAT-UP)に捕集
質量濃度測定	捕集後のPTFE製フィルタを、環境制御チャンバ(electro-tech systems Model 5532)を用い $21.5\pm1.5^{\circ}\text{C}$ 、相対湿度 $35\pm5\%$ で24時間コンディショニングした後に精密天秤(METTLER TOLEDO XP2UV)で秤量
イオン成分測定	捕集後のPTFE製フィルタを超純水に浸漬し、超音波照射で成分を抽出した溶液をディスクフィルタ(東洋濾紙13HP020CN)でろ過し、イオンクロマトグラフ装置(Thermo Fisher Scientific FRM2025i社製「Integrionシステム」)で陰イオンAS17-Cカラム・陽イオンCS16カラムにより測定
無機元素成分測定	捕集後のPTFE製フィルタを硝酸・フッ化水素酸・過酸化水素(いずれも関東化学Ultrapur)の混合液に浸漬し、マイクロ波加熱装置(Anton Paar Multiwave PRO)を用いて加熱分解・濃縮した溶液を誘導結合プラズマ-質量分析装置(PerkinElmer NexION2000)で測定
炭素成分測定	捕集後の石英繊維製フィルタをサーマルオプティカル・リフレクタンス法分析装置(Sunset Laboratory OC/EC Lab Instrument Model 5)でIMPROVEプロトコルにより測定

表4 測定項目

項目	内容
イオン成分	硫酸イオン $\text{SO}_4^{2-}$ 、硝酸イオン $\text{NO}_3^-$ 、塩化物イオン $\text{Cl}^-$ 、ナトリウムイオン $\text{Na}^+$ 、カリウムイオン $\text{K}^+$ 、カルシウムイオン $\text{Ca}^{2+}$ 、マグネシウムイオン $\text{Mg}^{2+}$ 、アンモニウムイオン $\text{NH}_4^+$
無機元素成分	ナトリウムNa、アルミニウムAl、カリウムK、カルシウムCa、スカンジウムSc、バナジウムV、クロムCr、鉄Fe、ニッケルNi、亜鉛Zn、砒素As、アンチモンSb、鉛Pb、マンガンMn、コバルトCo、銅Cu、セレンSe、モリブデンMo、カドミウムCd、バリウムBa、トリウムTh、ベリリウムBe、チタンTi、ルビジウムRb、セシウムCs、ランタンLa、セリウムCe、サマリウムSm、ハフニウムHf、タンタルTa、タングステンW
炭素成分	有機炭素(OC1、OC2、OC3、OC4)、元素状炭素(EC1、EC2、EC3)、炭化補正值(OCpyro)

### 3 調査結果

#### (1) 質量濃度

各期間の質量濃度について、測定結果概要を表 5 に示す。

表 5 質量濃度測定結果概要

区分	平均値(最小～最大)	高濃度日	特徴的な気象内容
春季	10.3 (3.9～18)	なし	煙霧 (5/21～22、5/25)
夏季	5.7 (2.9～12.6)	なし	煙霧 (7/19)
秋季	7.5 (1.2～17.4)	なし	特になし
冬季	15.9 (4.1～31.9)	なし	煙霧 (1/21～1/23)
年間	9.8 (1.2～31.9)	なし	

(単位 :  $\mu\text{g}/\text{m}^3$ )

※ 高濃度日 : 1日平均値が  $35 \mu\text{g}/\text{m}^3$  を超えた日

平均質量濃度は、年間で  $9.8 \mu\text{g}/\text{m}^3$  であった。季節ごとでは冬季の濃度がやや高く、夏季に濃度が低い傾向であった。1日平均値が  $35 \mu\text{g}/\text{m}^3$  を超えた日ではなく、 $15 \mu\text{g}/\text{m}^3$  未満の日は 43 日（全捕集期間の 76.8%）であった。また、捕集期間中に黄砂の観測日はなく、煙霧の観測日は春季に 3 日、夏季に 1 日、冬季に 3 日であった。

各期間の濃度変化を折れ線グラフで比較したものを図 2 に示す。質量濃度の変動は冬季に大きく、その他の季節は同程度で推移した。

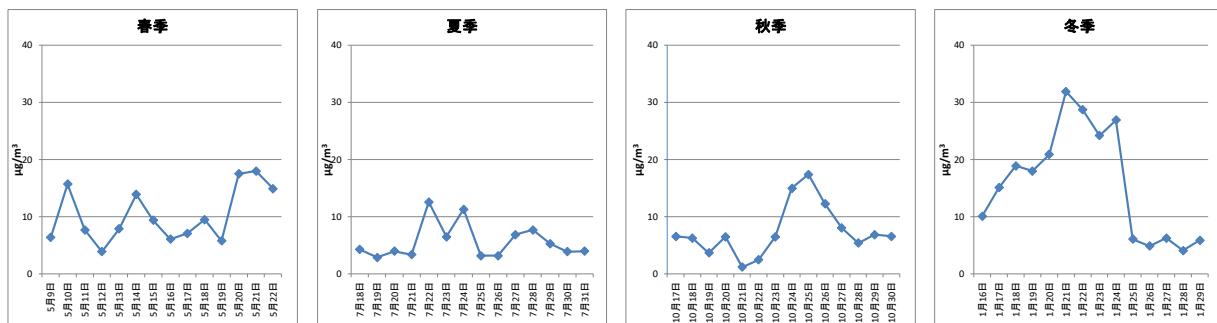


図 2 質量濃度変化

各期間の平均質量濃度と成分構成の概要を図 3 に示す。なお、ナトリウム・カリウム・マグネシウム・カルシウムについてはイオン成分及び無機元素成分の両方で分析・測定しており、この図ではいずれもイオン成分として扱った。

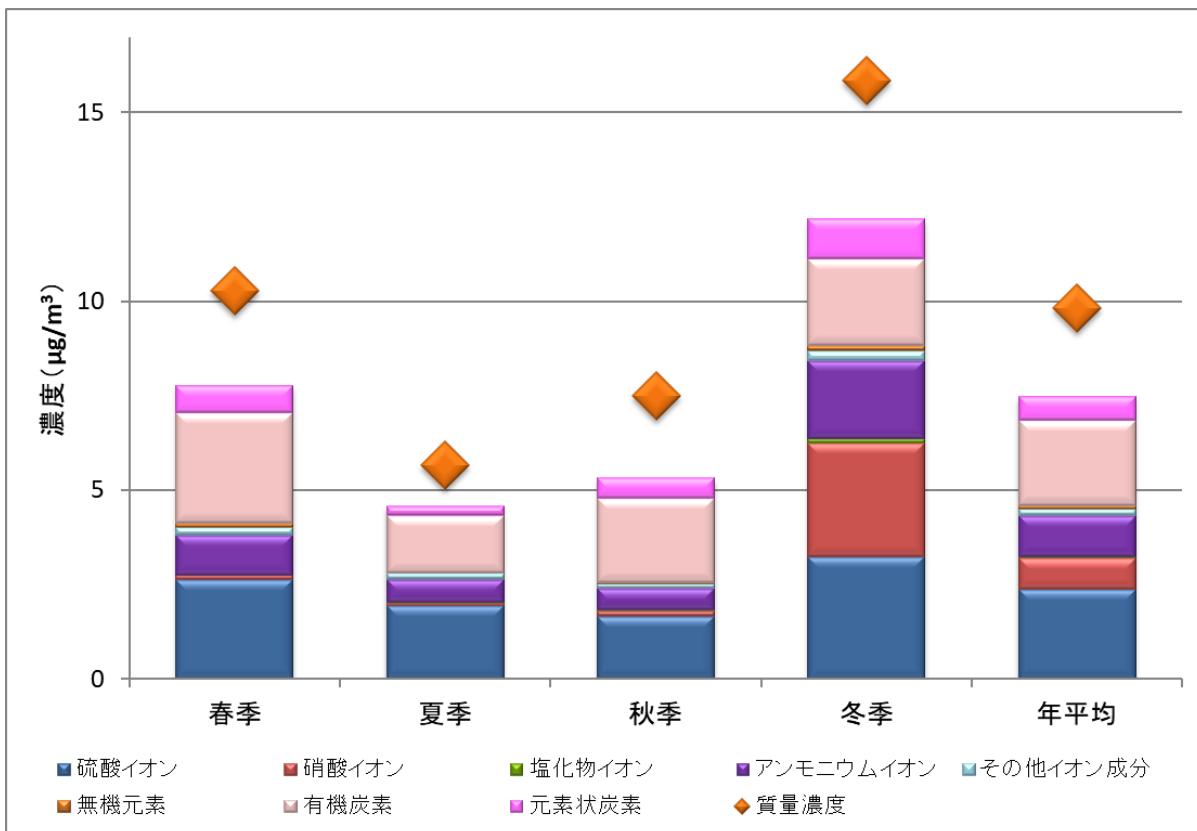


図3 各期間の平均質量濃度と成分構成

微小粒子状物質（PM2.5）の主要成分はイオン成分（粒子中では結合して塩類として存在しており、主な成分は硫酸アンモニウムや硝酸アンモニウムである）と炭素成分であった。

## (2) イオン成分

各期間のイオン成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合を表6と図4に、イオン成分の構成比を表7と図5に、各期間中の質量濃度とイオン成分間の相関係数を表8に、各期間中のイオン成分濃度変化を図6-1、図6-2に示す。なお、平均値等の算出にあたり、検出下限値未満となった成分については濃度を「0」として扱った。

表6 質量濃度・イオン成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合

区分	春季(n=14)	夏季 (n=14)	秋季 (n=14)	冬季 (n=14)	年間 (n=56)
質量濃度	10.3	5.7	7.5	15.9	9.8
SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>	2.63	1.94	1.66	3.24	2.37
NO <sub>3</sub> <sup>-</sup>	0.114	0.071	0.139	3.007	0.833
Cl <sup>-</sup>	0.0118	0.0208	0.0290	0.12445	0.0465
NH <sub>4</sub> <sup>+</sup>	1.06	0.615	0.571	2.06	1.08
Na <sup>+</sup>	0.072	0.110	0.053	0.071	0.076
K <sup>+</sup>	0.103	0.0232	0.0438	0.147	0.0792
Ca <sup>2+</sup>	0.026	0.011	0.007	0.028	0.018
Mg <sup>2+</sup>	0.0123	0.0111	0.0113	0.0185	0.0133
合計	4.02	2.80	2.52	8.70	4.51
割合	39.2%	49.5%	33.5%	54.9%	45.9%

(単位 :  $\mu\text{g}/\text{m}^3$ )

表7 イオン成分の構成比

区分	春季	夏季	秋季	冬季	年間
SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>	65	69	66	37	52
NO <sub>3</sub> <sup>-</sup>	2.8	2.6	5.5	35	18
Cl <sup>-</sup>	0.29	0.74	1.2	1.4	1.0
NH <sub>4</sub> <sup>+</sup>	26	22	23	24	24
Na <sup>+</sup>	1.8	3.9	2.1	0.81	1.7
K <sup>+</sup>	2.6	0.83	1.7	1.7	1.8
Ca <sup>2+</sup>	0.64	0.39	0.30	0.32	0.40
Mg <sup>2+</sup>	0.31	0.4	0.45	0.21	0.29

(単位 : %)

表8 質量濃度とイオン成分濃度変動の相関係数

区分	春季	夏季	秋季	冬季
SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>	0.88	0.97	0.93	0.81
NO <sub>3</sub> <sup>-</sup>	-0.05	-0.53	0.85	0.94
Cl <sup>-</sup>	-0.45	-0.38	0.44	0.69
NH <sub>4</sub> <sup>+</sup>	0.88	0.97	0.93	0.93
Na <sup>+</sup>	-0.07	-0.19	0.22	-0.59
K <sup>+</sup>	0.81	-0.26	0.90	0.86
Ca <sup>2+</sup>	-0.37	0.65	0.03	0.24
Mg <sup>2+</sup>	0.59	-0.07	0.14	-0.42

※捕集期間中に5日以上検出下限値未満となったイオン成分は「-」表示とした。

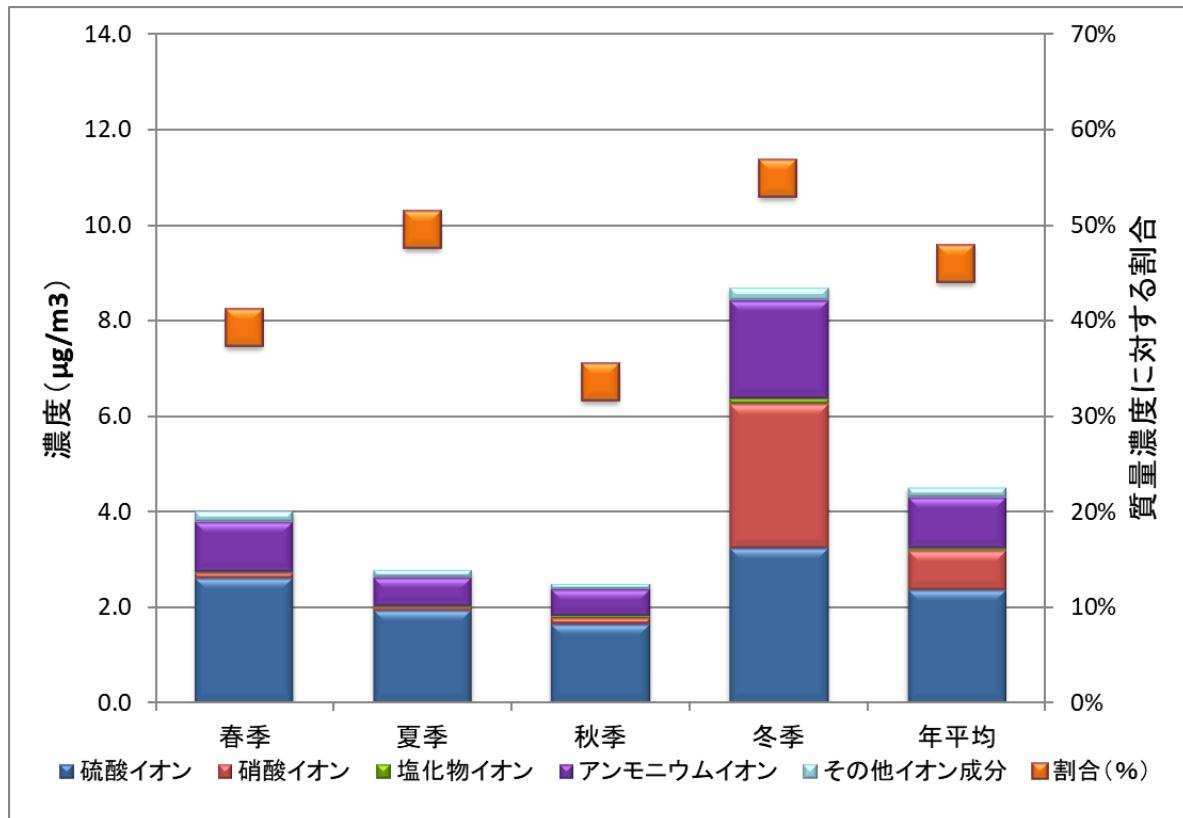


図4 イオン成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合

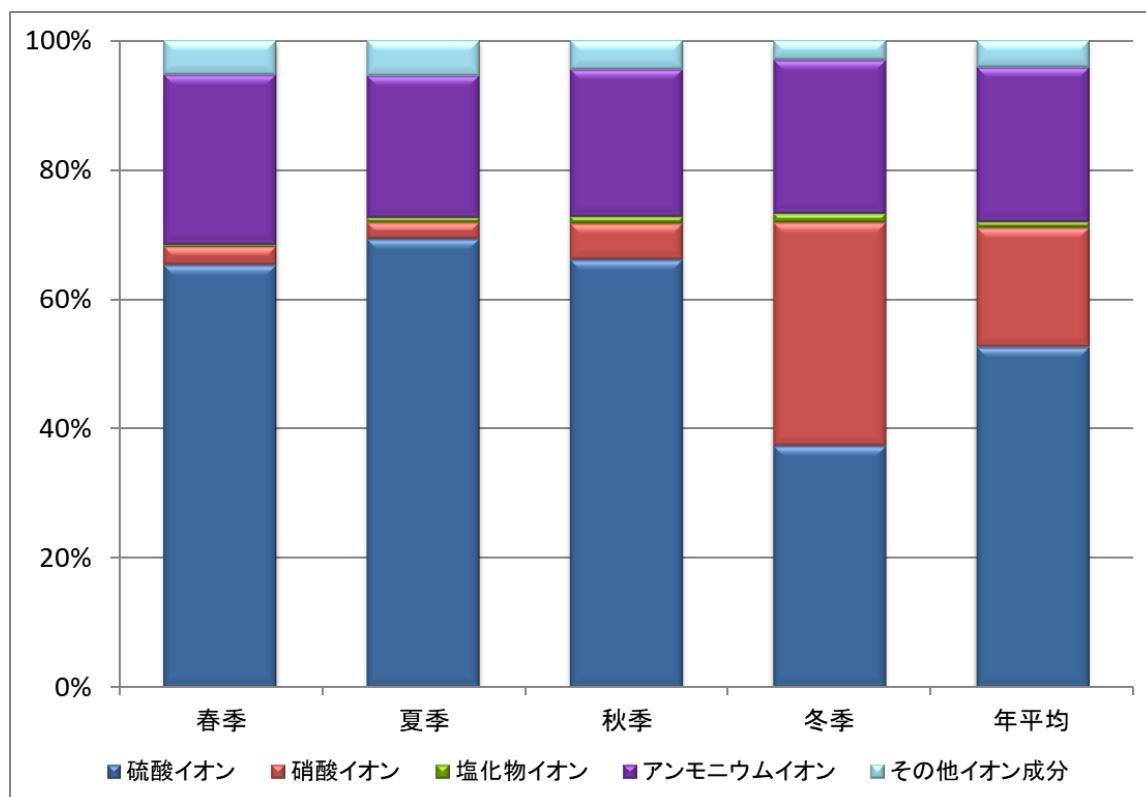


図5 イオン成分の構成比

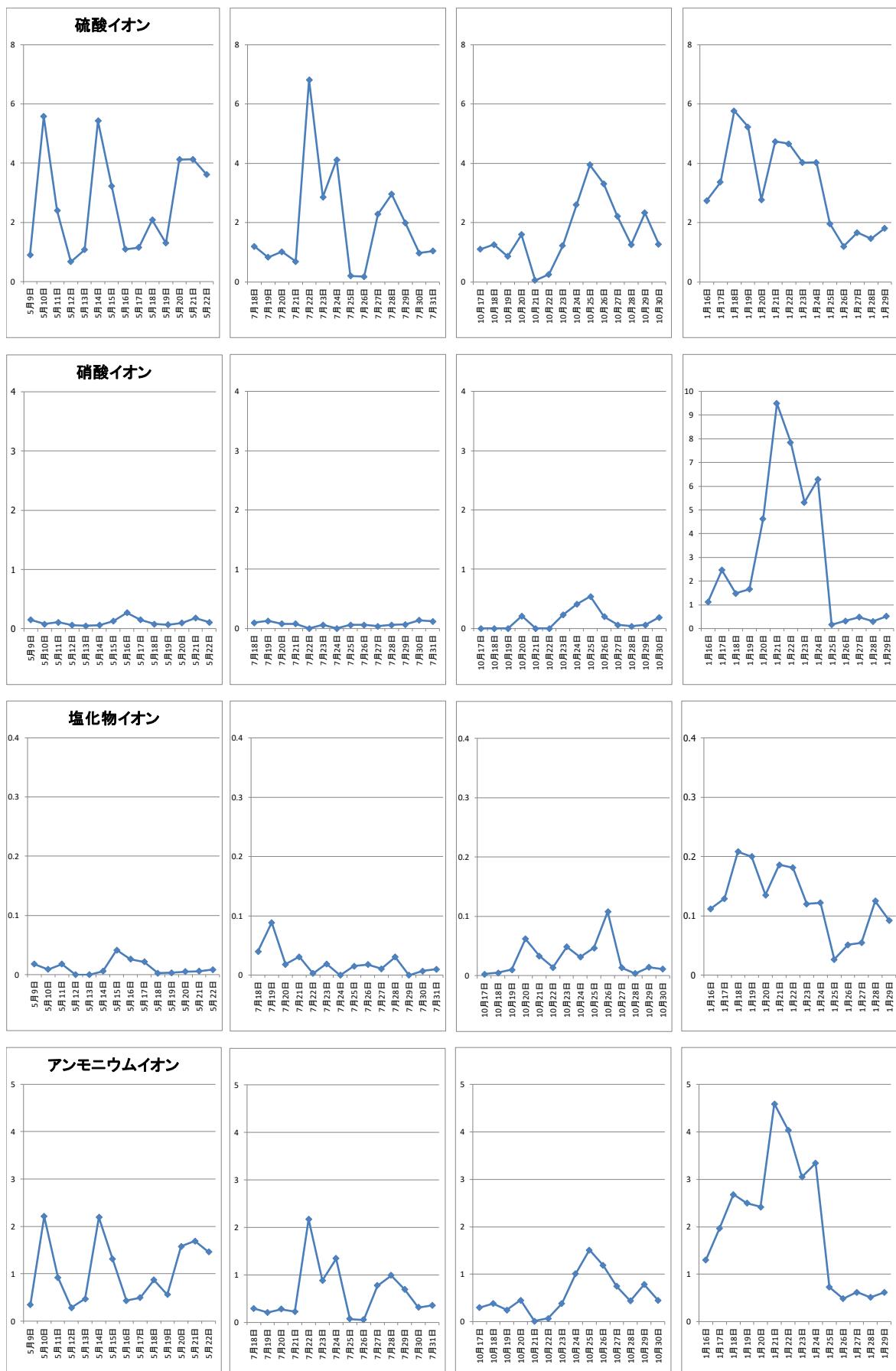


図 6-1 各期間中のイオン成分濃度変化(単位： $\mu\text{g}/\text{m}^3$ )

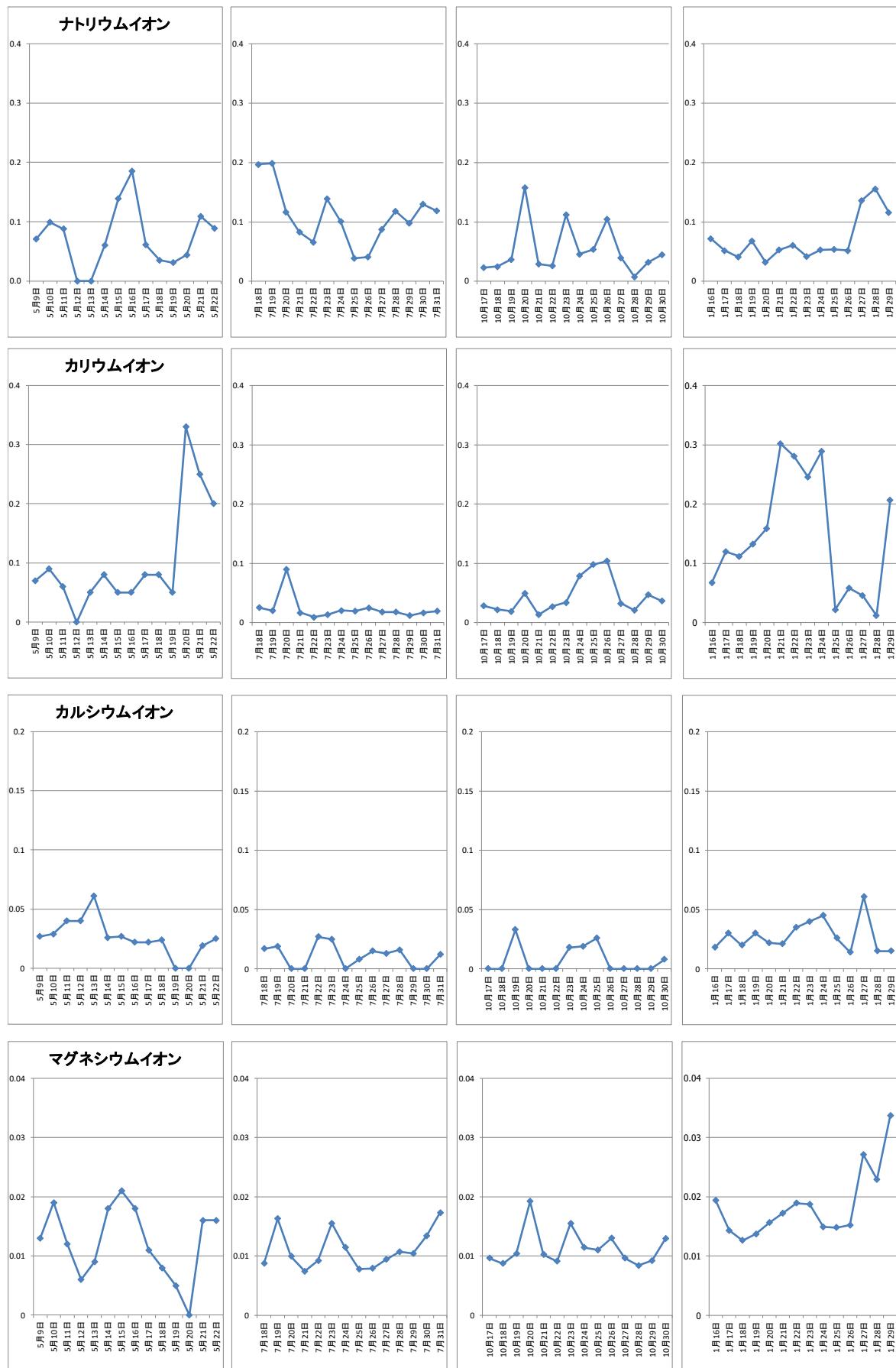


図 6-2 各期間中のイオン成分濃度変化(単位 :  $\mu\text{g}/\text{m}^3$ )

イオン成分が質量濃度に占める割合は、年間平均で45.9%であり、夏季及び冬季に比較的高かった（表6、図4参照）。主要成分は、春～秋季が硫酸イオン及びアンモニウムイオン、冬季が硫酸イオン、硝酸イオン及びアンモニウムイオンであって、粒子中ではこれら成分が結合し硫酸アンモニウムや硝酸アンモニウムとなっていると推察された（表7、図5参照）。

硫酸イオンは、主に硫黄分を含む化石燃料の燃焼に由来し、大陸からの移流が影響していると推察される。年間を通じて主要なイオン成分であり、質量濃度との相関も比較的高かった（表8参照）。構成比でみると、春季から秋季にかけては約60～70%を占めている（表7、図5参照）。

硝酸イオンは様々な燃料の燃焼に由来し、大陸からの移流が影響していると推察される成分である。濃度は季節により大きく変動し、もっとも高いのは冬季であった（図6-1参照）。春季・夏季の濃度が低いのは、気温等の条件により粒子を形成しにくい（あるいは粒子となった後に再び解離・気化している）ことが理由として考えられる。一方、秋季から冬季は気温が低くなるため粒子を形成しやすく、安定的に捕集され濃度が高くなったものと推察される。質量濃度との相関も冬季が高かった（表8参照）。

アンモニウムイオンは主に硫酸イオンや硝酸イオンと結合して粒子形成されることから、これらのイオン濃度とほぼ同様の挙動を示し（図6-1参照）、年間を通じて質量濃度との相関も高かった（表8参照）。

ナトリウムイオンは海塩などが起源であると考えられ、含有量は低かった（表6、表7参照）。質量濃度との相関も低かった（表8参照）。

カリウムイオンは植物バイオマスの燃焼や肥料などを起源とすると考えられている。含有量は低いものの春季及び冬季に高い日が見られた。（表6、表7参照、図6-2参照）。

塩化物イオンは海塩などを起源としていると考えられており、各季節で含有量が低い中（表6、表7参照）、冬季で高くなる傾向が見られた（図6-1参照）。

カルシウムイオン及びマグネシウムイオンは、各季節ともに含有量は低かった（表6、表7参照）。

### （3）無機元素成分

各期間の無機元素成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合を表9、構成比を表10、各期間の質量濃度と無機元素成分濃度変動の相関係数を表11に示す。平均値等の算出にあたり、検出下限値未満となった成分については濃度を「0」として扱った。

表9 無機元素成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合

区分	春季(n=14)	夏季(n=14)	秋季(n=14)	冬季(n=14)	年間(n=56)
質量濃度	10.3	5.7	7.5	15.9	9.8
ナトリウム	59.0	80.8	40.3	70.7	62.7
アルミニウム	34.9	<10	<10	26.6	30.8
カリウム	77.2	16.5	34.8	151.3	70.0
カルシウム	<27	<27	<27	29	29
スカンジウム	<0.03	<0.03	<0.03	<0.03	<0.03
バナジウム	0.443	0.339	0.244	0.626	0.413
クロム	<0.25	0.35	<0.25	0.74	0.54
鉄	35.3	6.5	23.0	49.9	28.7
ニッケル	0.3	0.3	0.3	0.8	0.4
亜鉛	19.59	4.53	15.57	28.66	17.09
砒素	0.929	0.360	0.500	1.230	0.755
アンチモン	0.335	0.129	0.320	0.713	0.374
鉛	2.95	0.325	1.20	4.27	2.18
チタン	3.7	<0.7	<0.7	3.7	3.7
マンガン	2.45	0.52	2.45	4.78	2.55
コバルト	0.020	0.009	0.010	0.032	0.018
銅	0.65	0.14	0.67	1.56	0.76
セレン	0.437	0.179	0.348	0.854	0.455
ルビージュム	0.190	0.045	0.101	0.267	0.151
モリブデン	0.13	<0.08	0.24	0.40	0.26
カドミウム	0.093	0.016	0.061	0.194	0.091
セシウム	0.013	<0.003	0.009	0.017	0.013
バリウム	0.626	0.409	0.541	1.924	0.875
ランタン	0.025	<0.005	0.011	0.033	0.023
セリウム	0.050	<0.008	0.016	0.053	0.040
サマリウム	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
ハフニウム	<0.19	<0.19	<0.19	<0.19	<0.19
タンタル	<1.1	<1.1	<1.1	<1.1	<1.1
タンゲステン	0.142	0.044	0.216	0.211	0.154
トリウム	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05
ペリリウム	<0.014	<0.014	<0.014	<0.014	<0.014
合計	239	112	121	379	252
割合	2.3%	2.0%	1.6%	2.4%	2.6%

表 10 無機元素成分構成比

区分	春季(n=14)	夏季(n=14)	秋季(n=14)	冬季(n=14)	年間(n=56)
ナトリウム	25	72	33	19	25
アルミニウム	15	—	—	7.0	12
カリウム	32	15	29	40	28
カルシウム	—	—	—	7.7	12
スカンジウム	—	—	—	—	—
バナジウム	0.18	0.30	0.20	0.17	0.16
クロム	—	0.32	—	0.19	0.22
鉄	15	5.8	19	13	11
ニッケル	0.14	0.28	0.21	0.21	0.17
亜鉛	8.2	4.1	13	7.6	6.8
砒素	0.39	0.32	0.41	0.32	0.30
アンチモン	0.14	0.12	0.26	0.19	0.15
鉛	1.2	0.29	0.99	1.1	0.87
チタン	1.5	—	—	0.97	1.5
マンガン	1.0	0.47	2.0	1.3	1.0
コバルト	0.0083	0.083	0.0085	0.0084	0.0071
銅	0.27	0.13	0.55	0.41	0.30
セレン	0.18	0.16	0.29	0.23	0.18
ルビージュム	0.079	0.040	0.084	0.071	0.060
モリブデン	0.056	—	0.20	0.11	0.10
カドミウム	0.039	0.015	0.051	0.051	0.036
セシウム	0.0056	—	0.0073	0.0045	0.0052
バリウム	0.26	0.37	0.45	0.51	0.35
テンタン	0.0104	—	0.0095	0.0086	0.0091
セリウム	0.021	—	0.013	0.014	0.016
サマリウム	—	—	—	—	—
ハフニウム	—	—	—	—	—
タンタル	—	—	—	—	—
タンゲステン	0.059	0.040	0.18	0.056	0.061
トリウム	—	—	—	—	—
ペリリウム	—	—	—	—	—

(単位 : %)

※無機元素成分濃度平均値が検出下限値未満となった元素成分は「—」表示とした。

表 11 質量濃度と無機元素成分濃度変動の相関係数

区分	春季 (n=14)	夏季 (n=14)	秋季 (n=14)	冬季 (n=14)
ナトリウム	0.31	0.10	0.00	0.32
アルミニウム	-0.40	0.93	-0.43	-0.69
カリウム	0.82	-0.10	0.83	0.11
カルシウム	-1.0	-	-	-
マグネシウム	-	-	-	-
バナジウム	0.65	0.10	0.59	0.05
クロム	0.04	-	0.26	0.45
鉄	0.36	0.92	0.77	0.56
ニッケル	0.27	0.48	0.62	-0.12
亜鉛	0.61	-0.22	0.49	-0.22
砒素	0.74	0.83	0.76	-0.14
アンチモン	0.75	0.37	0.94	0.24
鉛	0.72	0.67	0.90	0.06
チタン	-0.02	-0.66	0.05	0.19
マンガン	0.72	0.30	0.81	0.49
コバルト	0.26	0.58	0.68	-0.02
銅	0.84	-0.48	0.78	0.18
セレン	0.90	0.89	0.89	0.08
ルビジウム	0.62	0.03	0.93	0.28
モリブデン	0.72	0.83	0.63	0.46
セシウム	0.32	-	0.72	0.41
バリウム	0.22	-0.15	0.91	0.38
ランタン	0.14	-	-0.12	-0.07
セリウム	0.13	-	0.70	0.33
サマリウム	1.0	-	-	-
ハフニウム	-	-	-	-
タンタル	-	-	-	-
タンゲステン	0.10	0.07	0.45	0.38
トリウム	-	-	-	-
ベリリウム	-	-	-	-
カドミウム	0.90	0.85	0.92	0.10

※捕集期間中に5日以上検出下限値未満となった元素成分は「-」表示とした。

無機元素成分が質量濃度に占める割合は年間平均 2.6 %であり、春季・冬季に高く、秋季に低くなる傾向が見られた。含有量についても、冬季が最も高かった。主要成分はナトリウム(海塩起源)・アルミニウム・カルシウム・鉄(以上、土壤起源)・カリウム(植物バイオマスや肥料起源)などであり、これら主要 5 成分の合計は無機元素成分全体の 80 %以上を占めていた（表 10 参照）。その他の無機元素成分はさまざまな起源を持ち、それぞれで濃度変化の挙動が異なっていた。

#### (4) 炭素成分

令和 6 年度は昨年度に続き外部分析機関へ委託して炭素成分測定を行った。

各期間・地点の炭素成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合を表 12、構成比を表 13、各期間の質量濃度と炭素成分濃度変動の相関係数を表 14、各期間中の炭素成分濃度変化を図 7 に示す。

表 12 炭素成分濃度平均値及び質量濃度に対する割合

区分	春季(n=14)	夏季(n=14)	秋季(n=14)	冬季(n=14)	年間(n=56)
質量濃度	10.3	5.7	7.5	15.9	9.8
OC1	0.079	0.012	0.009	0.140	0.060
OC2	0.82	0.55	0.56	0.72	0.66
OC3	0.94	0.65	0.79	0.58	0.74
OC4	0.47	0.23	0.36	0.35	0.35
OCpyro	0.61	0.08	0.50	0.50	0.42
OC 小計	2.92	1.52	2.22	2.29	2.24
EC1	0.62	0.08	0.44	0.87	0.50
EC2	0.62	0.22	0.55	0.62	0.50
EC3	0.087	0.018	0.057	0.067	0.057
EC 小計	0.725	0.234	0.555	1.1	0.64
炭素合計	3.64	1.76	2.77	3.35	2.88
割合	35.5%	31.1%	36.9%	21.1%	29.3%

(単位 :  $\mu\text{g}/\text{m}^3$ )

※ 表 12 OC(有機炭素) 小計 = OC1+OC2+OC3+OC4+OCpyro

EC(元素状炭素) 小計 = EC1+EC2+EC3-OCpyro

表 13 炭素成分構成比

区分	春季(n=14)	夏季(n=14)	秋季(n=14)	冬季(n=14)	年間(n=56)
OC1	2.2	0.71	0.31	4.2	2.1
OC2	22	31	20	22	23
OC3	26	37	29	17	26
OC4	13	13	13	10	12
OCpyro	17	4.7	18	15	15
OC 小計	80	87	80	68	78
EC1	17	4.6	16	26	17
EC2	17	12	20	19	18
EC3	2.4	1.0	2.1	2.0	2.0
EC 小計	20	13	20	32	22

(単位 : %)

表 14 質量濃度と炭素成分濃度変動の相関係数

区分	春季 (n=14)	夏季 (n=14)	秋季 (n=14)	冬季 (n=14)
有機炭素 OC	0.85	0.53	0.82	0.17
元素状炭素 EC	0.76	0.39	0.94	0.20
全炭素 TC	0.84	0.51	0.85	0.18

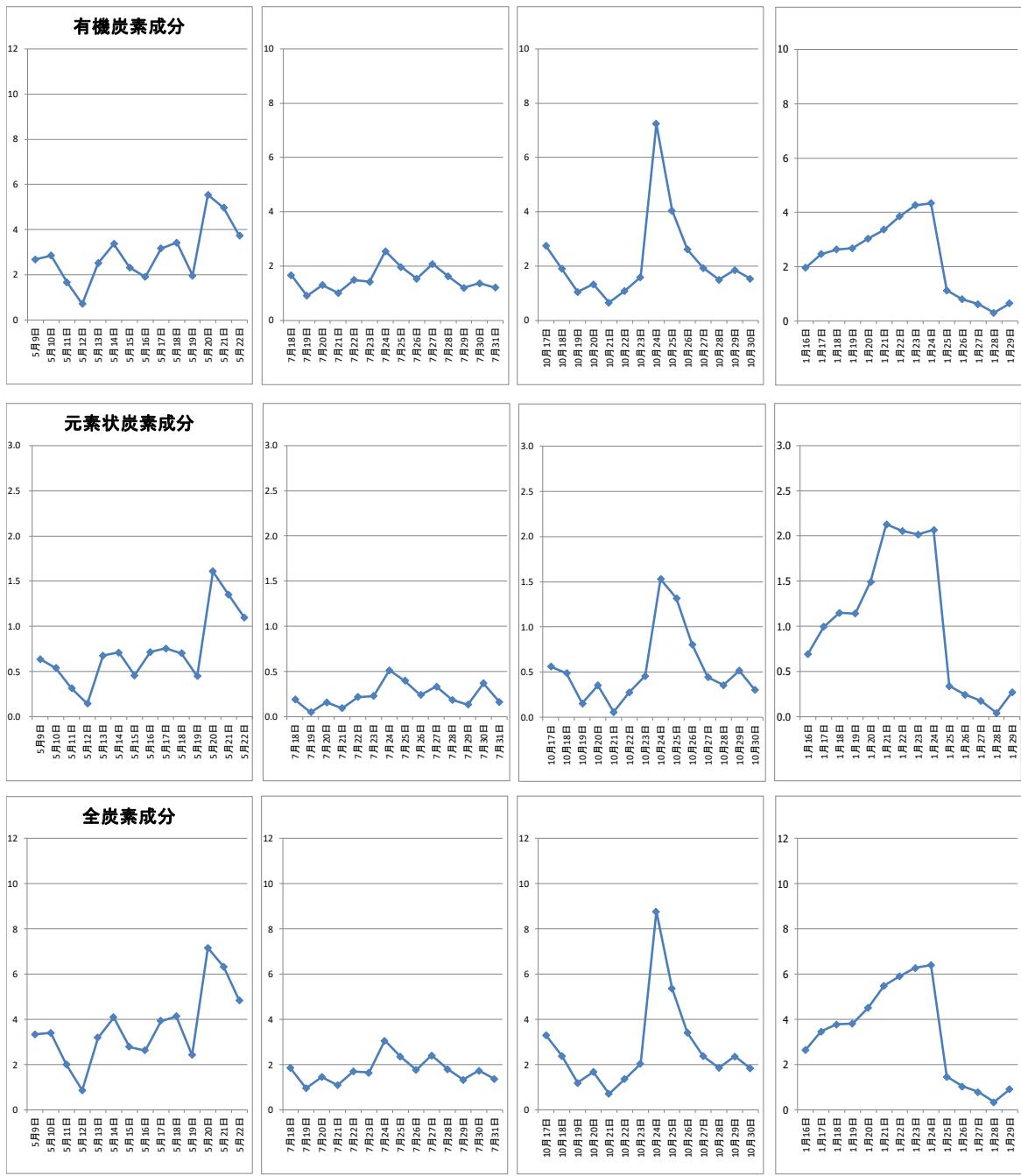


図 7 各期間中の炭素成分濃度変化(単位： $\mu\text{g}/\text{m}^3$ )

炭素成分濃度は、年間平均で  $2.88\mu\text{g}/\text{m}^3$  であり、夏季に低く春季・冬季に高かった。また、質量濃度に占める割合は年間平均 29.3% であり、春季、秋季に高い（表 12 参照）。質量濃度との相関も春季、秋季で高かった（表 14 参照）。

成分別では、元素状炭素成分 (EC) の濃度が夏季に低い傾向がみられたが（表 12、図 7 参照）、これは夏季では、元素状炭素成分のうち EC1（正確には炭化補正值 (OCpyro) を差し引いたもの）が他の季節に比べて少ないことによるものである。EC1 は低温での不完全燃焼時に生成する成分（いわゆる「すす」の状態となった炭素）と考えられており、夏季以外における局所的なバイオマス燃焼の影響が推察された。

## (5) まとめ

1. 質量濃度は、春季・冬季に高く、夏季に低い傾向であった。1日平均値が  $35 \mu\text{g}/\text{m}^3$  を超える観測日はなく、 $15 \mu\text{g}/\text{m}^3$  未満の日は 43 日（全捕集期間の 76.8 %）であった。
2. イオン成分が質量濃度に占める割合は、年間平均で 45.9% であった。主要成分は、春季・夏季・秋季に硫酸イオン及びアンモニウムイオンであり、冬季に硫酸イオン、硝酸イオン及びアンモニウムイオンで、その主成分は硫酸アンモニウムと硝酸アンモニウムであると推察された。
3. 無機元素成分が質量濃度に占める割合は、年間平均で 2.6% であった。主要成分は、ナトリウム・アルミニウム・カルシウム・鉄・カリウムなどであった。
4. 炭素成分が質量濃度に占める割合は、年間平均で 29.3% であった。炭素成分濃度は夏季に低く、春季・冬季に高くなる傾向であった。炭素成分別では、元素状炭素成分の濃度が夏季に低い傾向がみられ、局所的なバイオマス燃焼の影響が推察された。

## 文献

- 1) 環境省：水・大気環境局、微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析ガイドライン、2011.
- 2) 環境省：水・大気環境局 大気環境課長・自動車環境対策課長、大気中微小粒子状物質（PM2.5）成分測定マニュアル、2014.
- 3) 緒方美治、武原弘和、近藤芳樹、藤井幸三：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の実態調査（平成 25 年 2 月～3 月），熊本市環境総合センタ一年報、No.20, 49-58, 2012.
- 4) 緒方美治、飯銅和浩、坂口美鈴、吉田英美香、福田照美、近藤芳樹、藤井幸三：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析（平成 25 年度），熊本市環境総合センタ一年報、No.21, 51-65, 2013.
- 5) 緒方美治、飯銅和浩、渡邊隆、坂口美鈴、清藤順子、吉田英美香、福田照美、近藤芳樹、藤井幸三：熊本市における PM2.5 の高濃度予測時の 6 時間分解能観測による無機元素成分を中心とした発生源解析—平成 26 年 3 月～6 月の 4 期間の事例—，熊本市環境総合センタ一年報、No.22, 47-61, 2014.
- 6) 飯銅和浩、坂口美鈴、緒方美治、渡邊隆、清藤順子、吉田英美香、福田照美、近藤芳樹、藤井幸三：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析（平成 26 年度）—地点間比較を中心—，熊本市環境総合センタ一年報、No.22, 62-82, 2014.
- 7) 緒方美治、飯銅和浩、吉田英美香、福田照美、坂口美鈴、渡邊隆、清藤順子、津留靖尚、濱野晃、近藤芳樹、藤井幸三：熊本市における PM2.5 の高濃度予測時の 6 時間分解能観測による無機元素成分を中心とした発生源解析（その 2）—平成 26 年 12 月、27 年 1 月、27 年 2 月の 3 つの事例—，熊本市環境総合センタ一年報、No.23, 2015.
- 8) 緒方美治、飯銅和浩、吉田英美香、福田照美、坂口美鈴、渡邊隆、清藤順子、津留靖尚、濱野晃、藤井幸三：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析（平成 27 年度），熊本市環境総合センタ一年報、No.24, 44-55, 2016.

- 9) 佐々木一夫、緒方美治、吉田英美香、濱野晃、藤井幸三：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析（平成 28 年度），熊本市環境総合センタ一年報，No.25，36-55，2017.
- 10) 佐々木一夫、緒方美治、濱野晃、近藤芳樹：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析（平成 29 年度），熊本市環境総合センタ一年報，No.26，35-51，2018.
- 11) 西岡良樹、佐々木一夫、緒方美治、濱野晃、近藤芳樹：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析（平成 30 年度、平成 31 年度），熊本市環境総合センタ一年報，No.27，43-71，2019.
- 12) 西岡良樹、佐々木一夫、福田善秀、濱野晃、近藤芳樹：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析結果について（令和 2 年度(2020 年度)），熊本市環境総合センタ一年報，No.28，25-41，2020.
- 13) 飯銅和浩、西岡良樹、福田善秀、濱野晃、近藤芳樹：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析結果について（令和 3 年度(2021 年度)），熊本市環境総合センタ一年報，No.29，29-45，2021.
- 14) 原田千恵、飯銅和浩、藤原基、坂口美鈴、近藤芳樹：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析結果について（令和 4 年度(2022 年度)），熊本市環境総合センタ一年報，No.30，27-43，2022.
- 15) 原田千恵 神崎剛志 藤原基 坂口美鈴 近藤芳樹：熊本市における微小粒子状物質（PM2.5）の成分分析結果について（令和 5 年度(2023 年度)），熊本市環境総合センタ一年報，No.31，31-48，2023.